

## 学校の飼育活動に関する Q&A



\*\*\*\*\*

本研究会誌が創刊号以来 21 号となりました。これまでに研究会の会員や有識者の先生方、研究大会の発表者や参加者から多くのご意見やご質問をいただき、その都度、論議したり回答したりしてきました。ここでは、本研究会誌やホームページなどの中から「学校における飼育活動の基礎基本」についての記事を Q&A の形式で紹介します。

### Q1 動物を飼育する目的は何ですか

**A** 児童を取り巻く生活環境や社会環境自然環境の変化から、生命尊重や死に直面する機会、飼育や栽培体験がきわめて少なくなり、生命の大切さや有限さを理解させる機会が失われ、生命を軽視する傾向が見られてきたということです。更に、テレビゲームやテレビ番組、雑誌等をとおして、生命の尊さに対する感覚が希薄化してきているという傾向の報告があります。その報告を見ながら、危機報告との感じを受けたわけですが、その危機感の中で、最近ではかつて経験したことのない、子どもが子どもをカッターで殺傷するという事件や、高層ビルの屋上から幼い子どもを突き落とす、などといった猟奇的な残虐な事件が続いています。その事件の背景については、多様な側面から専門家が分析し、その対策が講じられています。

インターネット上にもネット化への対策、カッターナイフの学校への持ち込み禁止、必要に応じて子どもの持ち物検査の実施などの対策が講じられています。しかし、これらの対策は必要であっても、モグラたたきゲームに等しいと言っても過言ではないと思います。最も大切なことは、子どもたちに命の大切さ、生命尊重の教育を強く推進していくことが必要であり、かつ重要であると考えております。そこに生命を大切にするという体験と継続的に学ぶことの価値を見いだすことができる動物飼育の重要性が存在するとともに、さらに目的を明確にし、子どもの人格形成や思いやりをもち、豊かな心の基礎を培う動物介在教育の実践が求められているところであります。

<研究会誌第 1 号 p14, 前会長宮下英雄先生の研究会発足の挨拶から>

## Q2 学校の動物飼育はどうあるべきですか

A 学校関係者の中に動物の飼育に対する基本的な誤解があり、それが学校における動物飼育を拒否したり、また適切でない飼い方に導いたりしているのではないだろうか。その啓発こそが本論文の目的でもある。学校での動物飼育のあり方は、学校という教育の目的の場にふさわしく、子ども集団と少数の教師という組み合わせの中で可能なものとして、かつ動物の愛護の精神と両立可能でなければならない。動物の飼育の教育的目的は、動物の体や習性を知るという生物教育の意味もあり、生態的環境に気づくという環境教育のねらいを持ち、さらに命を大事にするという大きなねらいにもつながるものである。

飼い方を子どもの発見に委ねるのがよいのではない。飼い方まで発見しては残酷な仕打ちを教えることになる。また、適切な飼い方の指導の上に子どもによる豊かな発見が十分に成り立つ。ときに、子どもの側の主体性を大事にするという理念の下で極端なやり方が学校現場で見られることがある。実際、ザリガニを釣って、教室で飼おうというときに、飼い方を自主的に発見することから始めようとして、何匹となく死なせてしまったという例もある。子どもが発見し工夫することを促すことは教育の基本であるが、同時に、動物を大事にして愛護するという姿勢も指導していくべきである。最小限、動物を死なせず、苦しめることのない飼い方は初めから教師が理解して、子どもに教えてよいのである。その上で、動物の生態や行動についていくらかでも面白い発見は可能である。

自然・野生に近づければよいのではない。自然・野生への幻想を捨てる。野生の動物の生態への誤解がある。その上、そのままがよいのではない。飼育の際

の清潔さとか餌のやり方は固定的な野生の動物のステレオタイプのイメージでとらえず、ペットとして考える方がよい。(中略)

すでに学校で飼うというところで、狭い飼育小屋という条件なのである。その範囲で可能なことをするのだし、そこで生きていける動物を選んで飼育するのである。野生の淘汰に任せることも出来ない。飼育するという責任が飼う人間の側に出来てしまっている。

動物に接すると自ずと命の教育になるのではない。継続的個別的で愛情のある世話を通して、愛着を抱き、動物の特徴や生態を理解していくことを通して可能になる。既に論じたように、その経過を通して子どもは命のあり方に目覚めていく。学校のどこかで飼っているから命の教育になるということではない。日頃からの接触が必要である。毎日のように子どもが目にするはずのところに置いておけば、自ずと命の教育が達成されるとも言えない。見れども見えずということはいくらでもある。具体的に世話や遊びを通して関わり、個体の認識を含め、個別的愛着のある関係を取り結ぶなどのところから、常日頃から子どもの心のどこかにその動物が居着くようになるのである。

<研究会誌第3号 p6, 本研究会顧問無藤隆先生の基調講演から>

## Q3 飼育する動物の種類は何が適切ですか

前回のシンポジウムでかわいいウサギを使った実践が発表になっていましたが、そのウサギを私の学校でも飼って、子どもたちに触れ合わせたいのですが、入手方法を教えてください。不登校対策に活用したいと思っています。また何匹入手すればよいですか。この種類の他にはどんな動物が適切でしょうか。

**A** 動物を導入するときは、動物が衛生上安心できる動物かどうか、**トル**性格はどうかなどを、あなたの学校を担当する近くの獣医師と一緒に検討し、導入した動物の健康を見てもらうのが一番です。その上で、子どもに触れ合わせるためには、人を見つめる丸い目と毛のある魅力的な動物でおとなしい性格で扱いやすいことが大切です。

そのためには、例えば群馬県獣医師会が繁殖させているホーランドロップイヤーという種類のウサギは小さめでおとなしいそうですので、適切かと思えます。しかしこのウサギは野外での飼育には適していません。ウサギは飼育舎で飼育するというお考えの学校には群馬県獣医師会は送ってくれないようです。そのあたりのご確認をお願いします。

不登校対策のためには、その担当の先生の部屋にペット動物を1匹だけ飼って、子どもの興味を向けさせると良いようです。動物は1匹の方が人になつきますので、子どもへの効果が大きくなります。ケージの掃除や餌やりを手伝ってもらいと、それを楽しみにすることができるでしょう。

ある小学校の校長室のモルモットの事例ですが、「世話係」の任命証を校長先生からもらったことで、これまで登校できなかつた1年生が、張り切って毎日葉っぱをなどの動物の好きな餌を持って登校し始めたという事例があります。最初は保護者が付き添ったようですが、徐々にひとり立ちして1ヶ月ほどで全く問題なく登校できるようになったということです。モルモットは餌をくれる人を見るとピーピーと鳴いて、寄ってくるため一層かわいくなり世話のしがいが大きくなるようです。

この学校では、ふだんは6年生が入れ替わり立ち替わり毎日掃除と世話に来てくれるそうなので、校長先生は「ちっとも大変ではない」と言っています。休みの日には子どもたちが交代で、小さな幼稚園児用のバスケットに入れて家庭に持ち帰っています。モルモットをやさしい性格に育てたければ、無人のところに一人にさせないことが大事で、持ち帰りやすい大きさの動物を選びましょう。その点、群馬県獣医師会のウサギやモルモットなどは、ある程度大きさがあり抱き心地がよいことから、小さなハムスターに較べて、子どもへの働きかけがずっと大きいと言えるでしょう。

<研究会誌第2号 p57, 動物飼育Q&Aから>

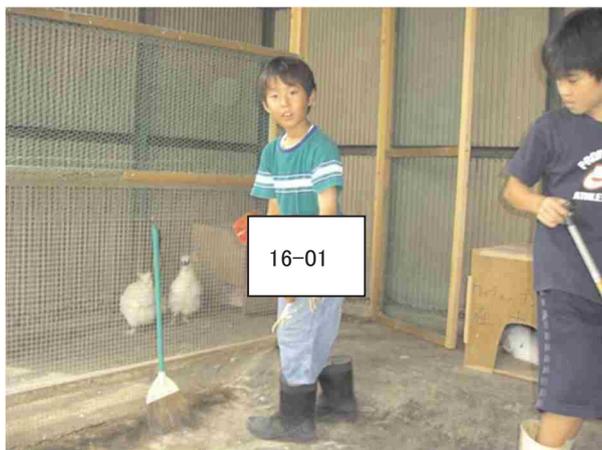
#### **Q4 望ましい「飼育舎」はどのようなものですか**

**A** 本来子どもたちは動物に興味があり、触りたがり世話をしたがる。飼育活動は子どもにとって興味を満足させ、優しい気持ちを引き出し、世話したことで達成感をもたせ、自己への自信と他のために働くという責任感と勤勉性を培う。また友達と協力することによって、友達関係の改善が図られ、学校を楽しいと感じる感情を共有できるようになる。このように「いつでも、どこでも、だれにでもできる、子どもへのよい刺激になる飼育の実現」には「笑い声が漏れる飼育、適度な作業でたっぷりのふれあい」になる条件が必要である。

「笑い声の漏れる楽しい飼育」  
～簡単な作業でたっぷりのふれあいを～  
・世話の簡単な種類を少しだけ…チャボとウサギ  
・掃除しやすい飼育舎…コンクリート床、巣箱  
・繁殖を制限して増えないように飼う  
・休日には保護者が当番児童に付き添う  
・地域の獣医師の助言と支援を得られる体制づくり  
「子どもの関心と愛情を培う」  
「飼育導入授業で子どもに親しみを持たせる」

子どもたちと学校にとって作業の負担が多すぎる動物飼育は、活動そのものが面倒な仕事になり、気持ちも肉体的にも飼育舎から遠ざかり、結果酷い状態に動物を放置し、その状態を直視できなくなり、ますます飼育舎から遠ざかるため、飼育活動による教育的な意義は感じられなくなる。

＜研究会誌第11号 p84, 故中川美穂子先生の「特集・飼育舎」から＞



#### Q5 ニワトリとチャボの違いはなんですか

**A** チャボはニワトリのなかまですが、愛玩用に人が小さく改良した品種で、形は小さいけれど、野生だったニワトリの原種の性格をよく残しています。卵をとるレグホンや肉をとるブロイラーなどは、卵をあたためて雛をかえすという本能がなくなっていますが、チャボは春から秋にかけて、日に1個ずつ、合計十数個になるまで卵を産み続け、温めて雛をかえし、夫婦で子育てをします。ニワトリのように孵卵器の中で生まれて、親を知らずに育つのと異なり、チャボは親から躰と文化を受け継ぐのか、思慮深く、やさしく家族を守ります。飼育するなら、性格もおとなしく、よくなついてくれるチャボにします。飼育している子どもたちの多くは、ウサギよりチャボをかわいいと言います。

また、動物は、気持ちが荒れるような飼育をされていると、人を怖がり、子どもを脅かすようになりますが、ニワトリは体も大きいので、子どもの手に負えなくなる心配があります。チャボは小さいので反抗も知れています。やはり愛玩用につくられたチャボを飼うことをお勧めします。

＜研究会誌第7号 p65, 動物飼育 Q&A から＞

#### Q6 動物は自然にいるものだから、巣箱は必要ないでしょうか

**A** 例えばニワトリは自然界では巣箱がありません。でももとのニワトリは東南アジア原産の鳥で、暖かい国に適していますから、日本のような冬のある地域では10月の終わりには巣箱が必要です。「去年は巣箱がなくても元気だった」としても、1年歳をとった今年は寒さに耐えられないかも知れません。歳のせいでも元気がなくなったと思うときは、なおさら巣箱を入れると元気に冬を越すことが出来るでしょう。

巣箱は木製が最適ですが、それが間に合わないときは段ボール箱に入り口を開けたもので充分です。中に新聞紙を敷いて、毎日それを取り替えればきれいに過ごせます。なお、動物はその中で糞をしてしまい、汚れると巣箱に入らなくなります。やはり自分のものでも糞のあるところでは寝たくはないですね。

巣箱の寸法は、間口45cm、奥行き40cm、高さ40cmあれば、チャボ数羽、あるいはウサギ1羽がのんびり暮らせます。仲の良いウサギなら2羽入ります。  
＜研究会誌第7号 p65, 動物飼育 Q&A から＞

**Q7 コンクリート床ではウサギは土を掘れないので  
かわいそうだと思います。どうしたらよいでしょうか**

**A** 土の床は、その下がコンクリートになっています。それはウサギの逃亡を防ぐためですが、同時に水分の逃げ場がなく、毎日の尿や時々降る雨水も溜まりま。そのため土が湿り、土の下の方ほどジメジメしています。ウサギが食べるために引き込んだ野菜からカビが発生するなど、土の中は非常に不潔になっています。また、雨のかからない飼育舎でも、乾燥した土が粉になって舞い上がり「子どもを中に入れたくない」と思う状態になります。

また落盤事故も起こりますが、ウサギが土にもぐってしまうため、ウサギの頭数もつかめず、子どもたちとウサギの交流もできなくなります。中には、飼育舎のそばに行くとウサギは穴の中に逃げ込んでしまうため、ウサギを見ることができない。だから親しみもわからず、夏休みはだれも世話に来なかったという学校の話も聞こえてきます。

ウサギは確かに穴掘りが好きですが、自然から離して飼育しているのですから、人にとって普通の管理がしやすいことが大事です。つまり子どもたちが少しの苦勞で飼育舎がきれいになり、その後ウサギとふれ合う時間がたっぷり確保できる方が、ウサギにとっても健康に楽しく生活できることにつながります。排水の勾配が完備したコンクリート床は掃除が早く終わります。  
<研究会誌第7号 p65, 動物飼育 Q&A から>

**Q8 獣医師が行っている学校飼育支援活動について教えてください**

**A** 日本の小学校では、昔からニワトリやウサギなどの動物を学校で飼育してきましたが、近年までほとんど

の学校で獣医師とのつながりはありませんでした。獣医師の仕事は元々ウシやブタなどの産業動物が対象で、イヌやネコなどの小動物の診療が本格的になってきたのは30年ほど前からです。そのため、ウサギやモルモットなどの小学校の飼育動物を診療できる獣医師がほとんどいませんでした。

しかし、生活科などの授業で動物飼育を取り上げる学校が急増したことから、愛知県獣医師会も2005年から本格的に学校の動物飼育への支援活動を始めました。現在では、「学校動物ふれ合い教室」が支援事業の中心になり、毎年多くの学校から開催のご要望をいただいています。毎年、「教職員向けセミナー」も開催し、動物のふれ合い授業のための実習や、これからの学校教育の方向性など多岐にわたる内容の講義を行っています。

また、独自に「学校協力獣医師制度」を立ち上げて、愛知県獣医師会全員が、学校での動物飼育を支援しています。

愛知県内のいくつかの自治体では、飼育支援活動の事業を地域の獣医師団体に委託しています。事業内容はそれぞれ自治体によって異なりますが、各学校が経費の面での悩みがなくなり、地元の獣医師とより身近に連絡を取り合うことができるようになるので、よい飼育環境を維持することにつながっています。委託事業内容や資料請求について愛知県獣医師会事務局にお問い合わせください。

<公益社団法人愛知県獣医師会編著「わかる！学校どうぶつ飼育ハンドブック」2017年 p84 から>



### Q9 獣医師との接点の取り方を教えてください

私の学校でも動物を飼育していますが、病気になったときの世話や飼育舎の改善などについて相談をしたいと考えています。どのようにすれば獣医師の先生方と接点をもつことができるでしょうか。

**A** 獣医師という職種は動物病院での伴侶動物の診療だけではなく、食の安全を守り、環境の保全を図り、公衆衛生に寄与するなど多岐にわたります。地球上の生命の総合的な関わりを探求する学問の中の、大きな位置を占めるのが獣医学です。そこで当然、学校で飼育されている動物についても、強い関心を寄せている獣医師は多いのですが、実は獣医師のほうでも学校との接点を探しています。しかし、本来の業務が多忙であり、動物の福祉を追及するあまりに学校での動物飼育との関わりをためらっている獣医師も少なくありません。そこで、「実際に子ども達のために動物を飼育してみたい」と考えておられる先生方から、積極的にアプローチをお願いしたいと思います。

まず、保護者の中に獣医師はいないでしょうか？  
いましたら率直にご相談ください。

次に、小学校の校区あるいは近隣の動物病院に出かけてみてください。動物病院は診療時間がありま

すのであらかじめ訪ねてよい時間を聞いてくださると動物病院側としては助かります。

これらの方法で相談できる獣医師が見つからない場合は、地域の獣医師会に連絡してください。獣医師会は公益社団法人日本獣医師会を頭として、47都道府県と8つの政令指定都市にそれぞれあります。公益社団法人か一般社団法人として、社会貢献を大きな目標の一つに掲げ、「学校飼育動物」に関する支援事業も行っています。電話で詳しく相談内容を話し、担当の獣医師を紹介してもらってください。実践されている教育活動の目的や内容を詳しくお話ししていただければと思います。

また、多くの自治体で教育委員会と獣医師会が協定を結び学校の飼育動物の診療や診療費の補助などを行っています。群馬県や青森県八戸市などでは「学校獣医師制度」を定めて、学校指定の獣医師という立場で学校にかかわる獣医師もおります。今後、そういう関係が広がっていくと、「相談に乗ってくれる獣医師を探す」悩みはなくなりますね。

<研究会ホームページから>

### Q10 アレルギーの児童へのふれ合い指導をどのようにしたらよいですか

**A** まず保護者にアレルギー事情を聞き、親と相談の上、マスクや手袋をさせてふれ合うようにしています。またタオルで動物をくるんで膝にだかせ、動物の顔だけを皮の厚い手のひらだけで触らせることもあります。

多くの場合、子どもは素手で動物を触ってもくしゃみやかゆみ、鼻水も出ないまま終わってしまい、不安が解消される場合があります。しかし子どもの様子を常に観察することは必要です。子どもが不安がるよう

であれば無理強いはしないようにします。実際にかゆみやくしゃみが出る場合は、マスクをはずさずに、直接的な動物との接触は避けるようにします。しかし飼育体験を楽しみにする場合が多いので、反応がおきない程度の世話をさせると良いでしょう。たとえば、餌を持ってくる、水入れの容器を洗う、手袋をして遠くから餌を与えるなどの活動を工夫することが考えられます。しかし、動物がいる教室に入っただけで、遠くにいてもくしゃみやかゆみ等の反応を見せるときは、



教室での動物の飼育は止めましょう。現在のところ、ウサギや小型ハムスター（ジャンガリアンなど）に反応することが多いようです。特にジャンガリアンなどの小型ハムスターに敏感に反応する人があり、スズメバチのアレルギーのように命に関わる事例がごく希に報告されています。ゴールデンなどの中型・大型のハムスターには、そのような事例は報告されていません。なお、動物の世話は1日に2度行って、ケージをきれいに保ち、換気を良くすることが大切です。そして、たくさん飼育しないことが、アレルギーを引き起こすことが少ないと言われています。

<研究会誌第3号 p61, 動物飼育 Q&A から>

## Q11 動物が死んだ場合どのように対応すればよいでしょうか

A 飼育していた動物が死んだときは、子どもの目に触れないようにするのではなく、獣医師に相談して「なぜ死んだのか？」を調べてもらい、動物の死について、子ども達に話をしてもらいましょう。

飼育していた動物が死ぬことは、子どもたちにとって大きなショックであり悲しいことです。また子どもたちは、動物が死んだのは自分たちの世話が悪かったせいではないか、と思い悩むこともあるようです。

専門家の話を聞いて、死について理解を深めることは、子どもたちのそんな気持ちを和らげ、また、“命”について考える良い機会になると思います。

みんなで、亡くなった動物にお別れする機会を設けることで、動物を飼育することの責任を学ぶことができるでしょう。亡くなった動物の死因を調べることで、感染する病気かどうかも判明し、同居していた動物を守ることもつながります。

また飼育動物により埋葬についての決まりが違いますので本書の p81「ウサギ・ハムスター・モルモットなどが死んだ場合」「ニワトリが死んだ場合」「ヤギが死んだ場合」などをご参照ください。

<公益社団法人愛知県獣医師会編著「わかる！学校どうぶつ飼育ハンドブック」2017年 p80 から>



**Q12 休日の飼育活動を保護者に協力してもらうにはどのようにしたらよいですか**

**A** 保護者に「土日の飼育が大変だから協力してください」と発信しても、保護者は嫌がるでしょう。また、一度支援すると子どもが卒業するまで6年間も支援し続けるとしたら、どなたも名乗り出られません。

保護者の支援を得るためには、飼育活動の意義を確認して、「わが校の方針として、命の教育、心の教育、生物教育の基礎として、飼育活動を小学校6年間のうち全員が一年間関われるように、学年全員が飼育活動にあたります。それについて、土日の世話が必要ですが、教員は休みなしになると、体力が持たないため、保護者がお子さんと一緒に交代で世話を分担して『命には休みがない』ということをお子さんに行動で伝えてください」と、春の保護者会で、飼育学年の保護者に、校長先生、学年主任の先生とそれぞれに訴えてください。「わが校の教育方針」として飼育

活動を紹介できれば、その学年の保護者は手伝います。一年間ですから、3クラスもあれば120家族もありますので、年に数回しか機会はありません。

親子当番の飼育日記に見る保護者の感想は「楽しい」「子どもがなぜ動物を気にするのか分かった」「子どもに感謝された」「子どもと楽しく話し合うことができた」と記され、良い親子の会話を誘っていることが分かります。楽しみを分ける感覚で紹介してみてください。

なお、地域のボランティアの支援について、うっかりすると動物好きの方が何年も続けて支援するため、動物に関して学校を支配するようになり、最後は「動物がかわいそうだから、子どもにさわらせない」などと言い出すことがあります。動物より子どもが大事と思う人に支援を頼むのが安心で、それはやはり保護者でしょう。

<研究会誌第8号 p75, 動物飼育 Q&A から>

